

南青協便り第221号



南米産業開発青年隊協会会報 2023年6月8日発行

Boletim n.221 Seinentai do Brasil : Edição 8 de junho de 2023



聖州ソロカバ市郊外のメモリアル・パーク墓地 (Cemitério Memorial Park) ここの建物で4月8日小山徳氏への告別を実施



綺麗な夕日・雲・ユーカリの木、2023-04-19 S.M.Arcanjo にて

【写真】上: 小山徳さんへの告別。下: 遺灰散布の一行。

告別は逝去された4月8日に行われ、16人の参列で場所はソロカバ市のセミテリオ・メモリアル・パークでした。青年隊からは4期鈴木源治、8期早川量道・志方進が参列しました(敬称略)



遺灰散布の一行 4月22日、徳さんの遺灰をサントス港の沖合に散布しに行った一行。ポ語で「徳さんの旅」(Viagem Toku San)とあります。



4月の例会報告

会長 渡辺進

4月15日（土）10時より月例会が山形県人会館で開かれました。

- 1) 3月の会計は承認されました。
- 2) 8期の小山徳さんが4月8日に亡くなりました。
- 3) 月例会で徳さんのいろいろな話が出ました。
私の意見ですが、みんなに愛されていましたが家族のいなかった徳さんと、最後までお付き合いしていただいた鈴木源治さんに、徳さんの最後のことばを会員の皆さんに会報で伝えていただけたらと思いました。
源さんよろしくご検討ください。
- 4) 渡辺がちょっと体調を崩していろいろ検査をすることになりました。
ご迷惑おかけしますが皆様のご協力をお願いします。
今までどおりみんなで協力してやっっていこうということになりました。
よろしくをお願いします。

徳さんのこともあり5人の8期の先輩方にも出席していただきました。

出席者は4期曾我義成、6期鈴木源治、8期早川量道、8期野末郁雄、8期山木源吉、8期長田譽歳、8期森安夫、単独渡辺進でした。（敬称略）



5月の例会報告

会長 渡辺進

寒くなりましたが、皆さんお元気でお過ごしのことと思います。

5月27日（土）10時より月例会が山形県人会館で開かれました。

- 1) 4月の会計は承認されました。
- 2) ガタパラ移住地61周年の入植祭の招待状をいただきました。
7月15日に開催されます。
- 3) 今年は健康上の問題で渡辺が上記入植祭に出席できません。
それで早川さんをお願いすることになりました。よろしく願います。
- 4) 鈴木源治さんは山形県人会の代表として出席されるそうです。
- 5) 青年隊の楯が行方不明なので、渡辺の家にある可能性が高いので確認すること。

お茶を飲みながら古い話に花が咲きました。

出席者は、4期曾我義成、6期鈴木源治、6期盆子原国彦、8期早川量道、
8期長田譽歳、単独渡辺進でした。（敬称略）

南青協便り216号のガタパラ60周年の記事と写真を見直して、たった1年しか過ぎていないのに、なんとなつかしく感じることでしょう。

特に今は徳さんの優しい笑顔がなつかしいです。車でガタパラに行きたいと言ったら細部まで地図を書いて説明。最後は俺も一緒に行くと。こんな徳さんのご冥福をお祈りします。



こやまのぼる
小山徳さん

さんぎょうかいはつせいねんたいはちきせい かいほうへんしゅういいん つと こやまのぼる
産業開発青年隊8期生で、その会報編集委員などを務めた小山徳さん
ようかごぜんさんじよんじゅうさんぶんすいぞうがん せいし びょういん な ぎょうねん
が8日午前3時43分膵臓癌のため聖市の病院で亡くなった。行年
はちじゅうさんさい どうじつごごさんじ せいしゅう し ぼち そうぎ
83歳。同日午後3時、聖州ソロカバ市メモリアル・パーク墓地で葬儀
おこな しょなのか よんじゅうくにちほうよう みてい
が行われた。初七日、四十九日法要は未定。

せんきゅうひやくさんじゅうくねんじゅうにがつ う なかのけんしゅっしん ろくじゅうにねんせいねんたいいん
1939年12月生まれ、長野県出身。62年青年隊員として
とほく はくこく にほんでんき じゅうねんいじょうきん む どうじ さいしん
渡伯、伯国では日本電気(NEC)ブラジルに10年以上勤務。当時は最新
ぎじゅつ そうしん ちゅうけいしせつけんせつ ぐんじせいけん
技術だったマイクロウェブ送信の中継施設建設を、NECが軍事政権か
ら受注。小山さんは1971、2年頃サンルイスからパラ州カ
じゅちゅう こやま せんきゅうひやくななじゅういち にねんごろ しゅう
シヨエイラまでその施設の工事で現場主任をした。

さんがつにじゅうくにち せいし びょういん にゅういん しがつよっか
3月29日に聖市サンルイス・イタイン病院に入院し、4月4日に
たいいん ちじんたく りょうよう つず なのか ようたい きゅうへん しゅうちゅうちりょうしつ
退院。知人宅で療養を続けていたが、7日に様態が急変。集中治療室に
はい よくようか しきよ
入ったが、翌8日に死去した。

へんしゅうびこう にっぽう きじ すうじいがい ほんぶん ふが
【編集備考】ブラジル日報のこの記事では、数字以外の本文のみに振り仮
な にはんご べんきょう かたがた すうじ
名がありましたが、ここでは、日本語を勉強している方々のために、数字
にも振り仮名をつけました。

(横書き：長田委員、振り仮名：志方委員)



花に囲まれた小山徳さんの遺灰の箱です

鈴木源治さんからメールで受信しました



南青協月間会計報告(3月分及び4月3日まで) 2023年4月3日迄

Data	Descrição	Débito	Crédito	Saldo
	2月よりの繰越分			34.933,69
27/Mar	Envelope (200)	91,00		
30/Mar	会報 220 号 Copia	1.249,50		
30/Mar	会報 220 号 Correio	715,70		
30/Mar	年会費 10 期千田功氏(257)		200,00	
03/Abr	年会費 1 期大島氏 Luisa Riroe Iwasa		200,00	
03/Abr	年会費 9 期荒木昭次郎氏(245)		200,00	
03/Abr	年会費 10 期阿部正司氏(315)		200,00	
	Rendimento		243,54	
	Total	2.056,20	1.043,54	33.921,03

<p>Bradesco の支店番号と口座番号 Extrato Conta Corrente Takatoshi Osada</p> <p>Agência 1480 Conta 0033226-7 Disp.P / Poupança</p> <p style="text-align: right;">Saldo</p>	33.921,03	<p>Agência 1480 Conta 33226-7 Takatoshi Osada CPF 698.506.588-00 CEP 04371-000</p> <p>Cheque の送り先 Takatoshi Osada Rua Rishin Matsuda, 467 VI. Sta. Catarina Jabaquara - SP</p>
--	------------------	--

南青協月間会計報告

2023年4月3日残高から4月30日迄

	Descrição	Débito	Crédito	Saldo
	4月3日よりの繰越分			33.921,03
13/04	年会費5期佐藤文雄氏		200,00	
13/04	寄付5期佐藤文雄氏		200,00	
15/04	年会費8期野末郁雄氏		200,00	
15/04	4月例会山形県人会借料	150,00		
17/04	年会費6期渡辺尊人氏		200,00	
17/04	年会費7期伊達尚仁氏		200,00	
17/04	年会費7期藤岡忠三氏		200,00	
17/04	年会費9期渡辺益男氏		200,00	
	Rendimento		196,42	
		150,00	1.596,42	35.367,45

<p>Bradesco の支店番号と口座番号 Extrato Conta Corrente Takatoshi Osada</p> <p>Agência 1480 Conta 0033226-7 Disp.P / Poupança</p> <p style="text-align: right;">Saldo</p>	<p>35.367,45</p>	<p>Agência 1480 Conta 33226-7 Takatoshi Osada CPF 698.506.588-00 CEP 04371-000 Cheque の送り先 Takatoshi Osada Rua Rishin Matsuda, 467 Vi. Sta. Catarina Jabaquara - SP</p>
---	-------------------------	---



リオで渡辺先生の所でお世話になっている間に、リオの町での家庭訪問での指圧の患者さんがボツボツ増えてきて、ある時昼食時にクレアと言うおばさん（65歳くらい）が「頭が痛と」言うので、岡井さん指圧をしてあげてと言われたので喜んでしてあげたら、とても良い、頭痛が治ったと喜んでいました。

人生は何がキッカケで運が向いてくるか、又は泥沼の世界にハマるか紙一重と言われます。

「よっちゃん」は幸いにととても良い運に恵まれていました。クレアのおばさんが渡辺先生に岡井さんに指圧を毎週してもらっても良いですかと尋ねたら、「ああ、いいよ！」と言ってくれたので、最初はリオの向かいにあるニテロイ市に行くのにプラッサ・キンゼの港からバルカ（BARCA 渡し船）に乗って20分ぐらいで着くので、毎週2回自宅訪問して治療していました。

これは後での話ですが「よっちゃん」はどうして渡辺先生は患者さんを紹介してくれないのかしら？ 毎日何百人も体の問題を浄霊で世話しているのにと疑問を持っていましたら、岡井さんは全然患者さんを紹介してくれと私に頼んだ事はないし、それなりに「よっちゃん」はやっているのだからと別に気にしていなく、必ず自分の道を開く事が出来ると信用していたのでした。

「よっちゃん」は渡辺先生の所で世話になっている間はジャンタ（夕食）の支度をしていました。結構美味しい、美味しいと言って食べてくれていました。彼の家には「よっちゃん」以外に4人の若者たち（救世教のお弟子さんたち）と一緒に住んでいました。彼ら達は帰ってくるのがいつも夜の11時過ぎでした。

食事を作る時はいつも余り物を使うせいか、時々近くの友達の小さなレストランに行き、戸を叩いて若い主人を起こして特別にビーフ（牛のステーキ）を焼いてもらって、安い DRURY'S の酒をグイグイと飲みながら、食べては夢を語り合っていましたね～。こんな夜中に叩き起こされてサービスさせられてよく怒られないと思っていたが、かの青年曰く、先生のお話をこんな近い所でお話を聞けるのは、お金や時間の問題ではないと言われた。

渡辺先生の夢は今住んでいる所の家を解体して、サンパウロ市以外で初めての教会をリオ市に建てることであった。大体300名位入る大きさの教会である。教会設計はあの当時まだ学生で建築設計を勉強している AGILDO と呼

ばれる若者に頼む事にして、色々と準備に取り掛かったものです。がここに大きい問題があったのでした。

あの当時のリオの救世教の収入（献金）はサンパウロとパラナを合わせた以上にあったので、リオで教会を建てるとなると本部の収入はガタンと減ってしまうので、本部では条件を出した。献金以外での収入でやりなさい！とね。これではどうしようも無い、一卷の終わりです。

しかし彼にはすごいドットール連中のブレンがいつも彼の側にいた。経営者、医者、弁護士、会計士、政治家など色々頭を絞って出した結論は、定期的にフェスタを開いて収益を上げる事でした。

リオ市には各州の人達が特に集まってくる所です。それで政治家を利用してある広場を借りてそこに各州の名産物や食べ物などを屋台を作って売って、そして収益を教会建設の為に得ようと言う作戦です。それが大当たりして徐々に教会建設資金を貯めて、ついには300名が座っていられるような素晴らしい教会を作ってしまったのです。

よく人の為、世の為に！と言いますがあまりにも漠然としている、頭では分かっているけれどもそれはどういう事かと具体的に説明するのは難しい。しかし上記のように教会建設と具体的に目標を定めて実行する。これはまさしく吉田松陰の言葉を実行したのではないかと思われます。

吉田松陰曰く

夢なき者に理想なし、
理想なき者に計画なし、
計画なき者に実行なし、
実行なき者に成功なし。
故に、夢なき者に成功なし。

これを契機に弟子達をどんどん養成して物凄い勢いで発展していきましました。リオを中心にミナス州、バイア州、ブラジリア、アマゾン他、あの頃の布教師たちは燃ゆる思いで活動していったのですね。そしてついにはサンパウロ市に9階建てのブラジル総本部と横に大きい教会を建ててしまったのでした。

しかし世の中は特に日本では出る杭は叩かれると言われます。あまりの発展に脅威を感じた日本の教会本部には所詮救世教を牛耳っている連中がいます。このままだと近い将来我々の教会の利権を侵されるに違いないと、必死に渡辺先生を追い出しにかかったのです。渡辺先生はこのままだと折角ブラ

ジル信者さん達の必死の思いで、作り上げてきた全てのブラジルの教会はじめ自然農園、その他の財産が牛耳られてしまう。

つまり日本側に乗っ取りされてしまうという危機にさらされてしまいました。日本の本部から救世教の教えに対してご指導されるのは素晴らしい事ですが、経営方針などに色々と携わってくるのは当地の本意ではない。それで日本では裁判まで行われたわけですが、九分九厘までは駄目だと思ったのが、契約証のあるちょっとした部分に日本側ではブラジルの救世教においては全て独立したもので、日本からの影響はなしとなったのです。

詳しい事はここに書く本意では無いので割愛しますが、「よっちゃん」の場合でも大変な問題がポルトガルに移住してから起こった事がありました。それはだいぶ後からの問題です。

さて、渡辺先生がリオの教会を建ててから、名古屋の渡辺先生の実家の親父さんから結婚する条件で日本に一時的に帰ってきなさいと連絡があり、そして日本に帰って行きました。親父さんは名古屋一体の救世教の総支部長で熱海の教会本部を建設した3人組の一人に数えられている人で渡辺勝市先生で、この人も言うにいわれない苦勞に苦勞を重ねてきた人でした。この先生の逸話をいつか書きたいと思っています。

渡辺先生は日本で結婚して帰って来たものの、結婚する前にはもう二人の恋人がいて結婚するぐらいまで燃えていたのですが、色々な事情でおじさんになり今の奥様（真子まさこ）になったのでした。

リオ教会の前に二部屋の小さいアパートを借りての新婚生活が始まったのでした。「よっちゃん」はその時はニテロイの町の中心に一部屋のアパートを購入していたのです。そこには日本人二世の弟子と同居していて、ニテロイの町に一ヶ所とコパカバーナに一ヶ所の計2ヶ所を掛け持ちで治療の仕事をしていました。

新婚ホヤホヤの渡辺先生の所にある日の夕方挨拶に行った所、中々嫁さんがサーラ（居間）に出て来ないので、はてな～？ と思っていたら、やっどこさ出てきたら、何と着物姿で出て来たのではありませんか！ 渡辺先生曰く、岡井さんは何年も日本人の着物姿を見たことがないので、着物姿を見せようと手間取りましたと豪快に笑って挨拶をしました。何と日本人のおもてなしは素晴らしいものだと思い、感激しましたよ！

続く ◆

北アマゾン・アマパ州のパレドンダムについて

滝本正美（5期）夫妻のことも ジュンジアイ 9期 荒木昭次郎

楽書倶楽部 第8号（2014年4月）に私の投稿文「ブラジルの建設工事。北アマゾンのダム：フェレイラ・ゴメスダム」がありますが、その最後の方に一寸書きましたが、この同じアマパ州アラグァリ河の上流にパレドンと云う水力発電ダムが1970から75年に建設され、発電しています。

このダム工事には我々開発青年隊第5期生で1959年に移住された滝本正美さんが奥さんのトヨ子さんと現場の社宅に住んで働いていたそうです。

私が滝本さんと知り会ったのは94年頃でしたが、当時住んで居たベロ・オリゾンテ市で家を建築中だった時に、或る建材店に行って建材を探していたら、一人の日本人も建材探しをしていました。

一言口を交わして別れ、別の建材店に行き見回っていましたが、先程前の建材店で会った日本人だったので、その偶然の二度の行き会いでお互いに驚き、話しをして聞いたら青年隊移住者の滝本と云う方で、この偶然の重ね会いにお互いにすっかり驚いた事でした。

その後お互いにミナス・テニス・クラブの会員でもあったので、時々会ってはテニスの打ち合いを続けていました（いつもコテンパンに打ち負かされていましたが）。滝本さんは日本でもダム建設工事現場などに働いたそう（確か日本国土開発会社だったと覚えています）、工事事務所で働いて居たトヨ子さんと知り会い、その後ブラジルに移住を決めた事を話したら、彼女も賛同してブラジルへの移住を決めて来られたそうで、ブラジルの辺地での暮らしもあまり気に掛けなかったそうです。

彼がブラジルに移住して最初に手掛けた仕事は一緒だった青年隊仲間数人と、コチア産業組合を通じてタピライの茶畑耕地の測量と区画整理工事などとか、またサンパウロ州のチェテ河に予定されたダム工事の調査と測量などの仕事などにも知り合った人から紹介されて参加したそうで、その内ブラジルの工事施工会社の人達とも知り合いが出来たそうです。

その後70年頃からはブラジルの各地に発電ダムの建設工事が多く始まり、アマパ州のアラグァイ河に建設が始まったパレドンダムの工事の測量部に呼ばれて行き、奥さんのトヨ子さんも一緒に遠い北半球のアマパ州都マカ

パ市から150km程田舎に工事が始まる現場に行き、社宅に住んでいたそうですが、この赤道地帯の田舎町では知っている食物はコメとフェイジョンそれにバナナ位だけで、料理などとはほど遠い地域で大変苦勞されたと云っていました。

このパレドン水力発電所はアマゾン地帯では最初に造られた水力発電ダムで、特に赤道を北に越えた場所でしたが、完成時に当時名の知れた地元の政治家（連邦議員）だった COARACY NUNES 氏の名を付けて1975年に完成しています。

ベロ・オリゾンテ市に移ってからも時々会ってはテニスと一緒にやっていました。ある日一緒にレストランで食事をと呼ばれて行った事がありました。レストランで会ってメーザに着き、私はコカを飲んでいましたが、彼にはビールが食事とかで、間もなく数本のビール瓶が空になっていたのを覚えています。その数年後でしたが、彼が病院に入院していると知って、病院に見舞いに行きましたが意識朦朧の病状で、もう見分けがつかない様でした。そして2, 3日後に別の病院に移されましたが、その病院では数日後にあの世に旅立たれました(16/03/2003)。

奥さんのトヨ子さんは彼亡き後にサンパウロ市に移り一人で住んでいましたが今年2023年3月に87才で亡くなりました。お二人のご冥福を心よりお祈り致します。



2月19日のカーニバルの日曜日の昼飯時、長女が電話で中華料理を食べに行こうと誘ってきた。私が、誰が行くかと聞くと、長女と2人の子供と私たち夫婦と言われ、何時も行く中華料理店なのでそれなら行こうと答える。

カーニバルは普通の年ですと、真夏の一番暑い時ですが今年の夏は冷夏で今日も小雨模様で少し寒い感じでした。今日は気の置けないカーニバルの日曜日ですので中華料理店も超満員で一時間以上待たされました。

昼食から帰っても家でする事は何も無いので、久しぶりにビールを一本注文して飲みました。ほろ酔い機嫌で、車で帰る途中、サンパウロに移り住んで最初に住んだ家の近くを通ったので、私は女房に「昔住んでいた家を見て帰ろう」と言いました。

その中華食堂から距離にして500メートル位ですので直ぐ分ると思いましたが、大通りの大きなスーパーの角を右に廻った通りが昔住んでいた Rua Loreto ですので直ぐ分ると思いましたが、その大きなスーパーマーケットが無くなってしまい、その自分たちの昔住んだ通りも分からなくなりました。

どうにもならないので長女のミユキに頼んで携帯で探してもらいました。

53年前に住んでいた下の写真の家が時代に取り残されたように、昔のままの姿で有りました。（角の家です）。



この家の屋根の庇の直ぐ下に昔のままの通りの名前と番号を見た時、私も女房も大きな感動と驚きで涙ぐんでしまいました。

昔式のゆったりした2寝室の大きな家に私夫婦と1歳半のミユキですので我々には大きすぎる家でした。この家は山梨県人会の会長の弟が契約した借家でした。その高野氏が日本に一年間の研修に行くので空いていた家で、そこに偶然入ったのです。

田舎での農業に失敗した我々には過ぎた家でしたが、その時には既に仕事も探してあり、その家賃の支払いにも問題は有りませんでした。私は日本でも機械屋としての経験が有ったので案外すんなり設備会社の仕事にありつけました。当時はブラジルの経済成長期で、日本からも次から次へとブラジルへの進出企業が続出で、残業が多い毎日なので金には困りませんでした。

この住宅区域 Bosque da Saúde (健康の森) は日系人が多く住む区域でした。

この写真を写した私の後ろ側には何本もの高層ビルディングが立ち並ぶ、住宅街に成ってしまいました。何で私の昔の家のみが時代に取り残された哀れな姿で残って居るのか不思議に思いました。

あの頃はコチア産組の田尻さんと我々の隊長だった進藤さんが直ぐ近くに住んでいて、時々我が家に寄ってくれました。同期の友人の山下公氏は大通りの我が家から400メートル程の距離に軽食堂を営んでいたもので、長女ミユキが歩けるようになってからは時々2人で歩いて行って、ハンバーグを食べていました。

彼のハンバーグは大きいので私と3歳のミユキで一個食べたら腹一杯でした。その山下公氏も2～3年前に亡くなってしまいました。

あの当時は写真の車置き場は無く入口は小さな開き戸のみで、周りは塀で囲まれていました。入口の前の木も有りませんでした。このボスケ・ダ・サウデの昔の家には3年程住んで、その後、現在のジャバクアラ駅の近くに移って来たのです。



小山徳氏が4月8日午前3時に膵臓癌で亡くなりました。行年83歳。彼の故郷は長野県の最北部の犀川の上流の雪深い田舎だと語っていました。小山氏の誇りはブラジルの北部の一州を除く他全洲を NEC の派遣技術者として働き廻ったことです。彼は終生妻帯せず独身を通しました。彼は女性が大好きで、何処に行っても「もてもて」でした。

私達8期生のブラジル渡航の総合訓練は1961年9月下旬、山梨県富士吉田市上吉田公会堂でした。80人からの大集団でほぼ全都道府県から集合しました。小山氏は大阪建設局の関西中央隊で出身は長野県でした。私は唯一山梨県出身でした。私はこの富士吉田の公会堂に召集される8日前までは、長野県木曾谷の牧尾ダムで重機の整備の仕事を2年近くしていました。その前は静岡県沼津市で2年近く過ごしました。

この長野県、静岡県と山梨県は言葉もほぼ同じで故郷みたいなものです。富士吉田に入隊して最初に話しをしたのは小山徳氏でした。

富士吉田の総合訓練に参加して一ヶ月程した頃、小山氏が富士吉田の近くの三ツ峠登山をしようと言われ、山下公氏と吉田欣司と私四人でむすび弁当を作って貰い、電車に乗って三ツ峠入口駅まで行き、そこから頂上まで歩きました。その4人の内今は私だけになりました。10月下旬の富士山麓地方は毎日透き通る様な素晴らしい天候で、正面に雄大な富士山を見て感無量でした。

小山氏の遺骨が入手され次第、小山氏が最も馴れ親しんだグアタパラ耕地の納骨堂に納めて貰うべく、グアタパラの小島氏に骨折って貰い、グアタパラの役員からも好意的にどうぞと了解していただきましたが、最後の世話見を託された直原アリセ氏がグアタパラは不都合だと言われ、海に流したのが4月22日でした。その時参加したのは15名で南青協からは鈴木源治氏と早川量通氏でした。

この連絡を受けたのは、鈴木源治氏から翌日の日曜日でした。無事終了したのでこれで一件落着とのことでした。

それで私が日本の埼玉県に住む遺族の妹さんに連絡したかと尋ねると既に電話して了解を得たと言われました。

私とその妹さんの電話番号を戴けませんかと尋ねると、何のために電話するかと鈴木氏は言われ、既に妹さんの了解は取ってあると言われる。私が鈴木さんに何か不都合な事が有るのかと尋ねると、鈴木氏は話途中でプツリ電話を切ってしまいました。

小山氏の日本の遺族の電話番号を持っているのは直原イザベウ夫婦と鈴木源治氏のみです。直原アリセ夫婦は小山氏が亡くなる3日前に遺言の調書を、弁護士を交えて読み上げ遺産相続の権利書にサインを取っているようです。亡くなる3日前の朦朧とした最後の瞬間の調書が果たして何処まで有効かは分かりません。裁判所の調停は少なくとも2年以上は掛かると思います。

小山徳氏が写っている下の写真が見つかりましたので掲載します。これは1996年に第一次の隊員の方々がサンパウロ市ジャバクアラ区の生長の家の別館で渡伯40周年記念集会をされた時に参加した8期生とパラナ訓練所で所長をされていた石井さん御夫妻です。中央が石井夫妻で8期生は左から



小山徳、長田譽歳、吉田欣司、高野泰久、志方進、佐藤揚明（敬称略） ◆

ルーラ政権早くも末期症状

サンパウロ 9期 貝田定夫

ルーラ政権が始動してから5ヵ月になろうとしているが、政府の基本方針がまだ示されていない。ルーラ政権は何をしたいのか、ブラジルの未来はどうなるのか、将来を見据えた方針・政策が全くない。

アダジ財務大臣が経済の基本政策を検討している、とメディアは報道しているが詳細は明らかでない。しかし、身内のグレイジ労働者党(PT)党首がアダジの検討している原案は政治的な自殺行為になる、と猛烈に批判している。党内では相当もめているようである。

財務大臣は政府内の重要閣僚である。にもかかわらず、ルーラが経済には素人のアダジを選んだのは何故なのか。経済の専門家に任せたくない素人ならばコントロールできる、と考えたのなら甚だ危険と言わねばならない。ブラジルの経済はとんでもないことになりかねない。

ルーラ政権の問題点は素人を財務大臣にただけではない。まずは政権の成り立ちから見てみたい。ボウソナーロは大臣の数を23まで減らし政府の効率を上げることを目指したが、ルーラは逆に大臣の数を37まで増やした。これは、ルーラが大統領選に勝つために16の政党の支持と引き換えに大臣を約束したからに他ならない。

選挙後は案の定、各政党による省庁の争奪戦となった。どの政党も大きな予算を持つ重要な省庁が欲しい。いい例がシモネ・テベ議員の処遇をめぐる争いだった。彼女は大統領選で3位と健闘し決選投票ではルーラを支持した。ルーラは彼女に環境大臣を提示したが彼女の所属政党はウンと言わない。最終的に企画省を新たに作りなんとか折り合いをつけた。各政党との駆け引きに明け暮れ、決選投票から最後の大臣を決めるまで60日間を要している。即ちルーラ政権が始動する前日まで大臣を決める作業に追われていた。

以上のことから見えてくるのは、選挙に勝って権力を握るのが目的であり、方針・政策は二の次。大臣の適材適所も無い。その代わりにルーラが言い出したのは「ボウソナーロの間違いを直す」だった。親分に続け、とばかり大臣達も同じセリフを繰り返している。あたかも「ボウソナーロの間違いを直す」が政府の基本方針のようである。

「外交は内政の延長線上にある」と言われるが、ルーラは内政よりも外交を先行させている。アダジが検討している経済政策も決まっておらず、国内で緊急の問題が山積しているにもかかわらず外国訪問を続けている。

ルーラは1月にアルゼンチンとウルグアイを訪問。2月には、アメリカでバイデン大統領との首脳会談を行っている。そして4月には中国を訪問した。

ルーラは始めに上海にある中国最大のIT企業ファーウェイを訪問、その技術を絶賛し5G通信(第5世代通信規格)の技術開発への協力を約束した。しかし、ファーウェイは欧米諸国から安全保障上の脅威と見なされている企業であり、アメリカは同盟国と連携してファーウェイを潰そうとしている。ルーラの発言はバイデンの神経を逆なでしたに違いない。

ルーラは北京で大歓迎され、習近平は手厚くもてなした。これで気を良くしたのか記者会見でルーラの問題発言が飛び出した。「アメリカは戦争を煽るのをやめ、和平のための対話を始める必要がある」と同行したブラジルのメディアに話した。

このことを知ったアメリカは「事実を見ようとせず、ロシアや中国の宣伝をそのままおうむ返しに言っている」と猛烈に非難した。ファーウェイの件で怒っている上に、辛辣に批判されたアメリカがこのまま引き下がるとは思えない。ブラジルに対して何かしら報復するのではないか。ルーラの無神経な発言が大きな代償を払うことになるかも知れない。

ルーラと習近平との合意事項の中に「自国通貨での貿易を強化する」というのがある。これは中国との貿易の決済にドルを使わず、中国の人民元またはブラジルのレアルを使うということである。しかし、人民元とレアルを比較すれば人民元が圧倒的に強く、人民元が使われていくことになるだろう。残念なことにレアルの信用度はきわめて低い。

ブラジルにとって中国は最大の貿易相手国であり 2016 年から 7 年連続変わっていない。ブラジルは大豆、鉄鉱石、石油、牛肉などを中国に輸出し、2022 年の輸出額 780 億ドル、輸入額は 200 億ドル、差し引き 580 億ドルの圧倒的な貿易黒字となっている。

ここでブラジルの輸出品の代金を人民元で払ってもらった場合、「もらった人民元で物が買えるのか」ということを見てみたい。

世界の主要通貨の割合は、1 位ドル 44%、2 位ユーロ 15%、3 位円 8%、4 位ポンド 7%、そして 5 位が人民元でわずか 3%となっている。

人民元は信用度の低い人気のない通貨ということがわかる。中国は情報を公開しない、発表する経済指数も実際とかけ離れている、為替が操作されている、などの不安要素が信用度を低くしている。一方、アメリカは国力が落ち、ドルの信用度が低下しているのも事実だが、それでも世界の基軸通貨の位置を保っている。ブラジルが中国以外の輸入品の代金を手持ちの人民元で払おうとしても、ドルで払ってもらいたいと言われるだろう。人民元をドルに換えねばならない。これでは「自国通貨での貿易」の意味が無くなる。

「自国通貨での貿易を強化する」は双方に平等のように見えるが、絶対的に中国有利でブラジルにとっては屈辱的なものである。中国による罫とも言えるだろう、油断のならない相手であることを肝に銘じるべきだ。ルーラが習近平のニコニコ顔につられて合意書にサインしたが後の祭り、ブラジル外交の大失敗。ルーラは責任を取らねばならない。

ついでに言っておきたいのは、ルーラ中国訪問の随行員は大臣、州知事、国会議員、実業家など総勢 83 名である。協議済みの事項にサインするだけなら補佐官、通訳など 10 名ほどで充分であり、彼ら以外の招待者は官費での遊覧旅行となる。随員 83 名のホテル代だけでも物凄い金額、税金の無駄使いも甚だしい。

さらに異常なのは随員として、労働組合の代表 3 名と MST(土地なし農民運動)のリーダーを招待したこと。何のため、と誰しも疑問に思うだろう。これは、ルーラが彼らを手なずけておいて必要な時に使うものと見られる。前政権時代、ルーラに敵対する議員の農場に MST を侵入させて荒らした事実があり、また同じことが繰り返される恐れがある。ルーラは悪知恵の働く悪人である。

外国訪問を続けるルーラは、4 月 24 日ポルトガルを訪問。翌日、予定されていた演説をするためポルトガルの国会に出向いた。ルーラが議場に入った途端、保守系の議員達が騒ぎ始めた。彼らは旗やプラカードを持ち「ルーラ、泥棒！お前の居場所は刑務所だ」、「汚職は許さん」などと叫び始めた。全く予期しなかったことが起きた。

ルーラは演説を始めたが騒ぎは続く、一向に収まらない騒ぎに業を煮やした議長が口を開いた。「議場の皆さん、礼儀と敬意を払ってください。無礼なこと、国会を汚すこと、ポルトガルの名を汚すことを止めてください」と大声を張り上げた。議場が少し静かになったところでルーラはまた話し始めたが、こともあろうに、ボウソナー口の悪口をとうとうと語り出した。外国の議会で自国の前大統領の悪口を言う、その低俗さにはあきれしかたない。労働者からの成り上がり者の限界が見えた。

議会の外では一般市民のデモが行われていた。大きな横断幕には「ルーラ泥棒、お前の居場所は刑務所だ」と書かれている。彼らは小旗やプラカードを持ち「さっさと立ち去れ」と叫んでいた。ポルトガルはブラジルの旧宗主

国、同じ言葉を話すだけではなく一般国民もブラジルの内情を知っているようである。

ポルトガルのテレビ局がルーラ随行団の大きさに驚いている。航空機2機で到着し飛行場から22台の車で移動したと報じた。ルーラと随行団は首都リスボンの最高級のホテルに4泊した。大統領用のスイートルームは270平方メートルあり、1日の宿泊料は7000ユーロ(約4万レアル)。大統領といえども1泊4万レアルの贅沢をしてはならない。国民の税金を使うとなればなおさらのこと、謙虚であるべきだ。ルーラの随行団は総勢75名、中国訪問と同様の大集団で税金の無駄使いをしている。

ポルトガルの次はすぐ隣のスペインを訪問した。ここでもポルトガルと同様、税金の無駄使いは続く。そして5月の始めイギリス国王の戴冠式に参列、ルーラは1泊3万7000レアルの王室用スイートルームに宿泊したと報道されている。ルーラが真に貧乏人の味方であり、彼らを助けたいと考えているのであれば、1泊3万7000レアルもの税金の無駄使いはしないであろう。「貧困層の味方という仮面」をつけているにすぎない。

ちなみに貧困層の実態を地理統計院(IBGE)のデータで見ると、600万人が極貧状態にあり、1ヵ月168レアルで暮らしている。また1200万人が1ヵ月486レアルで生活している。そして、ブラジルの総人口2億人の30%に相当する6000万人が貧困層である。

ルーラ政権一番の問題とも言えるのが、1月8日の議事堂などの襲撃事件である。この事件は発生から4ヵ月以上過ぎた現在でも294人(男208人、女86人)が拘束されていて、未解決となっている。最大の原因はパシェコ上院議長が調査委員会の設置を頑なに拒否してきたからで、4月26日になって

ようやく委員会が設置されることになった。なぜ時間が掛かったのか経緯を簡単に述べたい。

上院のソラヤ議員は調査委員会設置のために議員達のサインを集め、2月の国会で委員会が設置されると見られていた。ところがルーラは委員会設置反対を言い出し、同調したパシェコは屁理屈をならべ始めて決断しない。これには裏があり、2月の上院議長の選挙の際、ルーラが議員を買収してパシェコを当選させた経緯がある。パシェコはルーラに頭が上がらず、ルーラの言いなりになっている。

またルーラは委員会設置にサインした上院議員達に「サインを撤回しなければエメンダス・パルラメンターレス(Emendas Parlamentares)を払わない」と脅した。これは予算の中に国会議員が自由に使える一定額があり、いつ出すかは政府の権限となっている。ルーラはこれを利用し9人のサインを撤回させるのに成功した。ルーラの脅しと買収である。

委員会設置の可能性が無くなったのかと思われていたところ、4月19日、テレビ局 CNN ブラジルが衝撃の映像を公開した。1月8日襲撃事件の未公開のカメラ映像で、大統領安全保障室(GSI)の役人達が襲撃者たちを大統領官邸に迎え入れ案内している姿が映っている。GSIのゴンサルヴェス長官の姿も映し出されている。

「大統領官邸の入り口は何者かによって開けられた」ことがかねてから問題視されていたが、まさか政府の役人が開けたとは誰も想像していなかったであろう。映像公開後、ゴンサルヴェス長官は辞表を提出。彼は2003～2009年にルーラ大統領(当時)のボディーガードを務め、ジウマ政権では戦略局の顧問を務めるなど軍人の中でもルーラに近い存在と見られていた。これで急転直下、調査委員会の設置が確定した。これでボウソナーロ派議員達が勢いづくことになり、ルーラにしても反対する理由が無くなった。

さらに明らかにされたのは、警察庁長官がボウソナーロ支持者による襲撃を予測し、事前に文書で警告していたこと。内容を要約すると「過激なボウソナーロ支持者達がブラジリアの陸軍本部付近に集結している。この集団は1月7日か8日に三権広場に向かうものと見られ、議事堂、大統領官邸、省庁の建物などに侵入する危険性が高まっている。治安関連の諸機関においては、万全な対策を取られたい」となっている。法務大臣は事前に知っていたにもかかわらず十分な対策を取らなかった。大臣の責任問題にまで発展する可能性がある。

ルーラ政権による不祥事が次から次へと出てきているのに、最高裁は何もせず静観するのみ。反ボウソナーロの急先鋒、判事のモラエスは傲慢な態度でボウソナーロとその支持者を執拗に攻撃していた。それも取るに足らない小さなことを大げさに言うなど、判事にあるまじき言動をしていた。それがルーラ政権になってからはダンマリを決め込んでいる。「ルーラに買収されている証拠」と批判されても反論できないであろう。政治の腐敗と最高裁の墮落がブラジルの発展を阻害する最大の原因になっている。



幻想？ 妄想？

フォス・ド・イグアス 9期 斎藤信夫

5月に入り、周囲は秋深しと言った感じで、今朝は今年の最低気温でなんと、7℃でした（13日）。5月も中旬ともなれば、霜の降りることも、別段珍しい事ではありませんが、今年は今のところ、今朝が最低気温です。

話は先月の事で4月には珍しい、長雨が降っておりました。未明より降り出した雨は、静かにシトシトと云った感じで、ブラジルではあまりない雨の降り方でした。8時半頃事務所に行ってみる。去年の後半頃から、少しずつではありますが、滝見物の観光客が戻ってきました。とは言いまだまだほんの少しばかりです。事務所へ行っても、仕事らしい仕事は、ほとんどありません。1時間程雑用をして、テレビをちょっと観て、事務所をでます。

外に出ると「あれ！まだ降っているの？」ってな感じで、静かな雨は降り続いています。家に戻り、ソファに腰を下ろし、コーヒーなど飲みながら、スマートホーンのスイッチオンです。今やスマートホーンは万能の友と云った感じで、手から離せません。

ニュース、天気予報、歌謡曲、何か知りたいことがあれば辞書代わり、銀行なども今は殆んど行く事もなく、自宅や事務所で、出納から、払い込み、別の銀行への移入等 PIX であっ！と言う間にスマホがやってくれます。以前のように、銀行に行つて長い列に並ぶ必要もありません。

今時銀行へ行くのは、現金の出し入れや Gerente（ジェレンチ、支配人）と話をする時くらいです。なんとも空恐ろしい程の便利な万能器で携帯コンピューターと云ったところですね。

11時になって、少々早めの食前酒とばかりに、オレ流 caipirinha を作り、ベランダにでて、そば降る雨を眺めつつ、「一人酒、コップ酒、スマホで演歌を聞きながら、、、」。

テレビの何かかがどうもおかしいようだ。昨日からブラジルの一般放送もNHKの海外放送も入らない。どうしたのかなあ？そこで日本からの直送チャンネルに切り替えると、入りました、NHK総合で、丁度ブラジル大統領のルーラ閣下が中国訪問で近平サンと握手を交わし、肩を抱き合っているところです。

少し離れた所には、なんとあのジウマ殿（Dilma Vana Rousseff、元大統領）がいるじゃありませんか！それも、今にもサンバ踊りでもしそうなハシャギようです。

こんなところをブラジルの国民に見せてはいかん！ と ルーラは情報操作し、テレビを切ってしまったのだ！ そのせいで、昨日からブラジルの一般放送もNHKの海外放送も観られないのだ。それが証拠にルーラがブラジルへ帰国すると、テレビが普通に戻ったじゃあないか？

ルーラは今回の中国訪問で中国との貿易を増し、その支払いはドルをやめて、中国紙幣の人民元とするなどといった事も、今回の中国訪問でするか？ こんな事はまだ、ブラジル人には知られたくない。ホント？ これは妄想じゃあないの？

その後、いろんな人に会って話してみると、テレビ放送が3日間切れてしまったのは、何かのミスでこの地方だけのようでした。ルーラの中国訪問時に、テレビが観られなくなったので、変なデマが飛びかい妄想が頭を支配し、幻想となった？

この事件は以後、退屈な時に話すと大いに受けた。

こむら返り話代わりまして、今度はこむら返りの話です。「こむら返り」ってご存じですか？ そうです、夜中に足の「ふくらはぎ」がつって、痛くて、痛くて、七転八倒の苦しみをすることです。貴方もそんな経験をしたことがありますよね？

その時あなたはどうなされたのですか？ 「早く、痛みよ、去れ！」と脚を抱えて七転八倒しましたか？ いやいやここに、僅か5秒でなおる秘伝があるのです。

発作が起きたら、素早く、そう出来る限り早く、ベッドから降りる事です。そして床に立つ。それだけでいいのです。5秒あれば十分ですよ。

床に立って、足踏みをしてください、それでも痛みが取れなければ、部屋の中を数歩歩いて下さい。これで「こむら返し」の悪夢から解放されるでしょう。それではまた、次号でお会いしましょう。



「移民のふるさと巡り」に参加して（２）

サンパウロ ４期 曾我義成

さて、前号で移民ふるさと巡り、イボチ植民地訪問記は会報締め切り期限の都合で写真だけを載せていただきましたが、今回、鈴木貞夫さんから移住地創設期の概要をいただきました。次のとおりです。

「私達も移住して、はや 62 年の歳月が過ぎさりました。ここ南伯のリオ・グランデ・ド・スール州とサンタ・カタリナ州の公募による移住は 1956 年でした。その当時、ポルト・アレグレに文化協会が設立され、この中に農研クラブが発足して、植民地造成の気運が高まり、有志によるコロニア造成が 1966 年にイボチ植民地になったのです。当時の移住事業団の支援もありました。

1969 年、イボチ農畜産協同組合が正式に発足しました。イボチ農協では初期はフランゴ飼育とイタリア葡萄の栽培でした。青年隊員の入植者は松村清(2 期 n. 44)さん、大桃邦美(7 期 n. 197)さんと私です。

松村ご夫妻と大桃ご夫妻は、悲しいことに浄土に旅立ってしまいました。

市会議員の愚息（鈴木スカルド智）は南日伯援護協会長として、2 期目になります。なお、私の外務大臣表彰の受賞は 2018 年 7 月でした。」

追伸： イボチ植民地の詳しい歴史は南青協便り（2015 年 11 月第 172 号）23 ページからの鈴木さんの寄稿文「夢のまた夢」を参照して下さい。寄稿されてから 7 年半の月日が経ちましたが移住地の変遷が理解出来ることと思います。

1966 年入植した青年隊員は故松村清(2 期 n. 44)、故大桃邦美(7 期 n. 197)と 鈴木貞夫(7 期 n. 188)の 3 名です。松村さん遺族はサンパウロ、大桃さん遺族はポルト・アレグレ市へ移転され健全な暮らしをされておられるということです。

他の移住者同様初期の苦難の開拓時代を屈服された鈴木さんご夫妻はイボチに定住され、花卉、果樹、野菜等の育苗栽培で成功され、現在に至っております。時代の経過と共に、私たち南青協会員家族も 2、3 世の時代になりました。

鈴木さんの子息、スカルド智氏はイボチ市市会議員に当選され現在 2 期目で地域社会発展のために活躍されておられます。私事、弊社が 2015 年に縁

あってイボチ市の隣町ノーボ・ハンブルグ市で請負工事をしておりました折、鈴木さんにはいろいろとお世話になりました。

南大河州最大の日系植民地イボチ（イボチ日伯文化体育協会）も全国各地の日系植民地、協会、団体に漏れず、すでに2世の時代から、3、4世の時代に入り後継者の問題で苦勞されて居られます。然し、イボチ協会は鈴木さんの子息が市会議員を務めておられる為、地域社会と政治、経済、文化等で共存、融和して盛んに交流が行はれているように感じました。継続は至難の業です。イボチ日伯文化体育協会のますますの発展を祈念します。



会館で開催されたふるさと巡り一行の歓迎会に隣町より飛び入り参加したドイツ系住民の伝統ドイツ民謡の演奏です。皆さんほろ酔い気分で伝統のドイツ民謡にうかれてダンスを楽しまれました。



中央の鈴木貞夫さんと訪問した私ども夫婦です。



このページの写真は2015年8月に訪問した時のものです。
見学したビニールハウスの花卉育苗栽培です。



邸宅前にて、左より鈴木ご夫妻、曾我、息子のマルセロ重雄曾我です。この時は息子も一緒に行きました。



「一生ボケない脳をつくる77の習慣」(4)

16 言葉と行動を「セット」にする

「やる」と言ってしまうえば実行せざるを得ない。

—その状況に自分を追い込めば、脳が若返る。

仕事なら「やると言ったこと」「やるべきこと」をきちんと「実行する」のは当たり前、それができなければ信用を失いますから、誰でも必死になってやり遂げようとしています。

しかし、プライベートの仲間内のことや家庭内のこと、まして「自分自身のこと」となると、「別に仕事でもないんだし」「そのうちやればいいや」と、ついつい先延ばしにしてしまうか、悪くすると放り出してしまうこともよくあることです。

しかし、どんなに素晴らしいアイデアや考えを言葉に「出力」しても、実践が伴わなければ、いったい何のための出力なのでしょう？——というところで「だから余計なことは言わないに限る」と考えを口にしなくなる人は、やることもなくなって、言うまでもなく脳の老化、ボケ状態への道をまっしぐらになります。

そしてアイデアを実践しようと思えば、その実践法を必死になって考え出そうとしますが、その過程でまたひとつ、脳は若返ることになります。

17 無理して「勉強」するのはやめる

歳をとればどうしても記憶力は低下する。そこにむやみに知識を詰め込んでも、意味がないし続かない。

むしろ今までにインプットしてきた様々な知識や情報をベースに「発信する・アウトプットする」ことが大事。

カルチャーセンターや大学のエクステンションセンターでは、「生涯、勉強」のようなスローガンを立てて生徒を募集しているところもありますが、いくつになっても「勉強しなくちゃ」「勉強が大事」という考えを持ち続けることが必ずしもいいとは言い切れません。

ひとつには、若い頃より記憶力が格段に低下しているところに、無理に知識を詰め込もうとしても「いっぱいいっぱい」になってしまい、結果続かなくなることがあります。

第二に、歳を取れば、これまでにすでにいろいろなことをインプットしているのだから、むしろそれらをアウトプットすることにエネルギーを注ぐほうがよい、ということです。言語学者の外山滋比古氏が、「大人になっても勉強をしたほうがいい」とおっしゃりつつ、「年寄りが図書館に行くと老け込むだけ」というのも、この理由からです。

読んだ先から読んだことを忘れてしまうくらいなら、本やテキストを読む入力主体型の勉強などやめて、その時間を、それまで得てきた知識や情報を駆使して何か新しいことを提唱したり、日記やブログなどに書き出す、つまりアウトプットすることにあてるのです。

「生涯、勉強」もアウトプットが前提なら、然りといえます。

中高年以降の「勉強」はいかに入力の割合を下げるかーそこがポイントになります。

【編集備考】

この稿は今回をもって終わりいたします。



シャッパダ・ディアマンチーナ訪問記（1）

サン・ミゲル・アルカンジョ 8期 志方進

4月23日から27日の5日間の旅程で、旧友Hさんの招待でバイーア州中南部のムクジェ (MUCUGÊ) 市へ行き、彼の邸宅に三泊して、国立公園のシャッパダ・ディアマンチーナ (CHAPADA DIAMANTINA、1800年代にダイヤモンドが採れたのでこの名が付いたそうです) のあちこちを見せてもらいましたので報告します。

前回の訪問は2016年1月だった（報告は2016年3月と5月の会報174号と175号でした）ので、実に7年3ヶ月振りでした。

前回は飛行機でサルバドル (SALVADOR) へ行き、そこから西方のムクジェまでは自動車で480kmの旅でした。今回は飛行機でサンパウロからはより近いヴィットリア・ダ・コンキスタ (VITÓRIA DA CONQUISTA) へ行き、ここからはムクジェまで自動車で約246kmでした。

23日の朝7時頃、Hさん夫妻が私ども夫婦を車で迎えに来てくれたので、4人でサンパウロのグアルーリョス空港へ行きました。飛行機の離陸は14時47分、ヴィットリアへの着陸は16時22分でした。

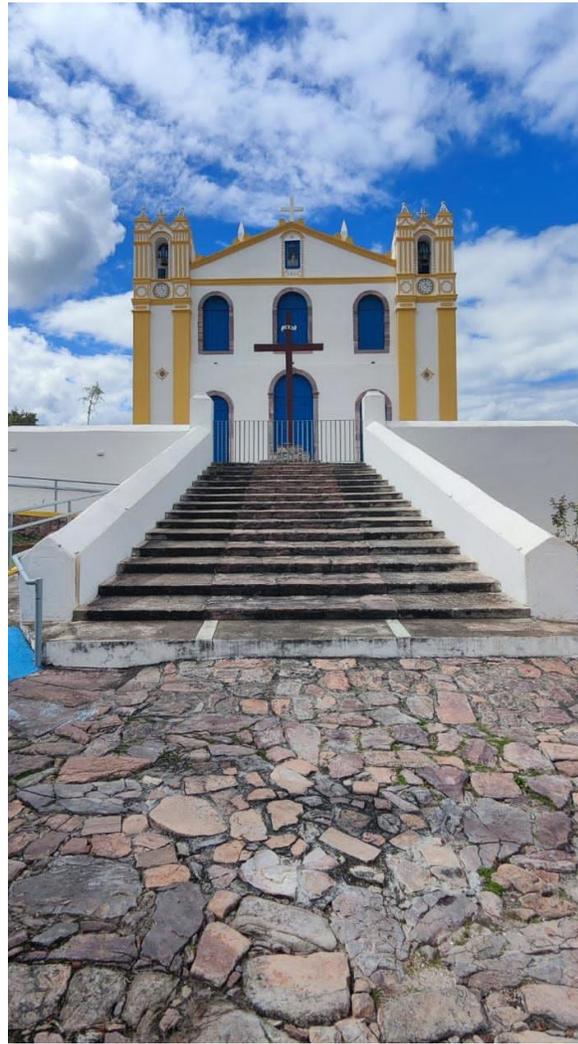
ムクジェに居住してシャッパダのファゼンダ (Fazenda、大農場) を管理・運営しているHさんの息子さんのCさんが自動車で迎えに来てくれて、ヴィットリア市内のホテルに5人全員チェックインしました。

17時半ごろ自室へ入ってトランクやリュックサックを納めて一休み。夕食は5人で市内の中国料理店で美味しく頂き、自室へは20時40分頃に戻りました。

ちなみに、ムクジェ市の標高は984メートルで、シャッパダの農地の標高は1000から1300メートルとのことです。

次頁はシャッパダの衛星写真ですが、農地の幅は20km余で、長さは約70kmとのことで、農地の両側には山脈があります。気候が良いので灌水出来る所では作物は良く出来るそうです。

この頁はムクジェの街の写真で、昔の町並みと石畳の道路を残すために、見えるところの改造は禁止されているそうです。ただし、塗装は許されています。従って、昔からの石畳以外の道路はありません。



石畳が美しいです。

農場本部の事務所・接客室



農場本部の作物選別場と倉庫及び機械整備工場



灌水用ため池の一つ。遠方に山脈が見える。



玉ねぎを植え付け中の畑。ここも遠方は山脈。



つづく



【編集委員メールアドレス、ご連絡用電話番号】

そ が よし なり
曾我義成 ysoga@rimobloco.com.br 事務所(Escritório) 11-4057-2377
携帯(Tel. Celular) 11-97120-0863

ぼんこはらくにひこ
盆子原国彦 kbonkohara@live.jp

おさだたかとし
長田譽歳 takatoshi.osada@gmail.com 自宅(Residência) 11-5563-6929

しかたすすむ
志方進 ssshikata@gmail.com 自宅(Residência) 15-3279-1521

皆様ふるってご投稿ください。ご投稿を受信しましたら、着信通知を発信しておりますが、ご投稿の到着を確認してください。
ご意見、ご提案、お叱りなどもお寄せください。

【次号予定、お願い】

次号は8月上旬に発行予定です。

ご投稿は7月20日(木)までにお問い合わせ致します。

【お知らせ】ブラジル日報紙の5月16日の記事に「実現するか南米大陸横断高速道=メルコスルは一带一路に入る？」という記事がありましたが、転載出来ない記事でしたので、ご希望の方はブラジル日報に連絡されて有料のPDF会員かWEB版会員に登録されて読まれたらいかがでしょうか。
登録されれば有効期限内のすべての記事と過去の記事が読めます。

【編集後記】

今号も多くのご投稿をありがとうございました。

皆様お元気でお過ごしください。

